若いチカラが未来を変える！

11月３日(祝･火)、市役所において佐野市高校生地域定着促進モデル事業推進員の委嘱状交付式が行われました。推進員は、市が行う高校生地域定着促進モデル事業により委嘱するもので、東京圏への転出傾向が強いとされる高校生に市の魅力発信について考えてもらい活動することで、郷土愛を深めてもらうことを目的としています。９月に参加者を募集したところ、９人の高校１年生が申し込んでくれました。高校生のほか、活動のコーディネーターとして任命された小野和也さんと大和田正勝さんにも、委嘱状が交付されました。交付式後、佐野市の魅力を発信するにあたり、まずは佐野市を知っていただこうと市職員による佐野市の概要説明が行われ、ご当地グルメの試食をした後、佐野駅前で記念撮影が行われました。交付式では緊張した様子の生徒たちでしたが、記念撮影時には明るい笑顔が見られました。

参加者の千葉愛莉さんは「佐野市の高校生として積極的に取り組み、市の魅力を発信していきたい」と意気込みを語ってくれました。

佐野黒から揚げプレゼント企画実施中！

佐野から揚げ協会設立２周年を記念して、抽選で「佐野黒から揚げ」などが当たるキャンペーンを１１月１２日(木)から実施しています。佐野市公式ＬＩＮＥをお友だち登録するだけで抽選に参加できます。毎週木曜日の正午に抽選チャレンジをＬＩＮＥで配信します。

キャンペーン参加店では、さっそく当選したプレゼントクーポンで佐野黒から揚げをゲットしている方の姿も見られました。

キャンペーンは、令和３年２月１１日(木)まで実施していますので、佐野市公式ＬＩＮＥに登録して抽選にチャレンジしてみてください！

市長からのメッセージ

早いもので、今年も残すところひと月となりました。

令和２年を振り返ると、これまで経験したことがない異例の年でした。

１月、令和元年東日本台風からの復旧・復興に向け皆さんと一緒に「復興元年」と位置づけ歩みを始めた矢先、新型コロナウイルス感染症に見舞われました。２月末、国からの要請を受け、本市でも３月から小中学校の休校措置を取るとともに、卒業式も例年と違い大きく縮小したものとなってしまいました。卒業生はもちろん保護者の皆さんにも大変ご迷惑をおかけしました。

その後も感染拡大が続く中、４月には全県に対し緊急事態宣言が出され、県をまたぐ移動や不要不急な外出の自粛など、我々の生活が一変する事態となりました。５月下旬には全県への宣言解除となりましたが、その間、皆さんには不便をおかけしながらも感染予防に対しご協力をいただき、改めてお礼申し上げます。

９月に入り本市でクラスターが発生。家族間感染により小中学校の児童生徒にも感染者が出たことから、すぐさま市独自の緊急事態宣言を発出し、感染拡大防止策の徹底を行いました。学校関係者の不安解消のため学校名の公表を行うとともに県の検査に併せ、本市独自でも対象者を広げた検査を実施したことで感染の封じ込めを行うことができました。学校名の公表については色々な意見もありますが、私は公表することで、風評被害などによる混乱もなく対応できたと感じております。これも市民の皆さんのご理解とご協力のおかげと感謝いたします。

これから冬本番を迎え、感染者の増加の傾向も見られます。インフルエンザとの同時流行も懸念されていますので、皆さんも油断せず感染防止対策の徹底をお願いします。

来年が、皆さんと明るい話題ができる年になりますように。

（11月11日　記）

岡部正英

今回の表紙　「第４０回消火競技会」令和２年11月５日撮影

佐野市危険物保安協会会員と佐野市女性防火クラブ会員による消火競技会が行われました。空気が乾燥する季節になりました。火のもとに十分注意しましょう。

※市のフェイスブックでも、市内のイベントなどの様子をお知らせしています。ぜひ、ご覧ください！

山からの展望

佐野市には多くの山があります。足利市と尾根が連なる大小山は、頂上が岩場になっていることもあり、展望は３６０度、日光や赤城、八ヶ岳、奥秩父、奥多摩、富士山、丹沢、筑波山などよく見えます。またこの山頂から、条件が良ければ、北アルプス、特には槍ヶ岳が見えると聞きました。特に夕方、日没時には見えると言うので挑戦しました。何度か試み、この春きれいに槍ヶ岳を撮影できました。下りは、夕方ですから山道は真っ暗。足元に気をつけての下山です。また、三毳山（みかもやま）からも槍ヶ岳は見えるそうですし、唐沢山からの展望もなかなかのものがあります。山に囲まれた佐野市には、豊かな自然がたくさんあり、こうした自然を大切にしたいと思います。

（市民記者　福田満）

おめでとうございます！　長寿を祝す敬老慰問

市内で１００歳を迎える方々を中心に長寿を祝う「敬老慰問」が１０月１４日(水)から１６日(金)にかけて行われました。現在、佐野市において１００歳以上の方は、男性７人、女性９８人の計１０５人。最高齢者は、男性が１０５歳、女性は１０８歳（９月１日現在で、令和３年３月３１日までに達する年齢）。

このうち、今年度１００歳を迎える方々を中心に、市長がご自宅などへ訪問（写真：慶祝状を受け取る大橋コウさん）し、慶祝状と敬老祝金を贈呈しました。大橋さんの自宅では、親族が集まり、１００歳のお祝いをしていました。これからも皆さんお元気でお過ごしください。

佐野弁 ばんざい

目籠をかぶるとメケゴができる

顔や頬などに、しみや吹き出物ができたというだけで、年齢のせいだからとか、肌の手入れがどうだからと話は結構長引きます。ところが、顔の一部に腫れ物などができると、話題はさらに膨らみ、それに適当な語（方言）をつくっていうことさえあります。まつ毛の根もとにばい菌が入って炎症を起こす病気を麦粒腫、俗に〝ものもらい〟ともいいます。まぶたの縁が赤くはれて、痛みやかゆみをともないます。この病気にメカイゴという方言がつけられ、それが後にメケゴに変わりました。

畑や庭の雑草や野菜などを取り入れる竹製の籠「めかご」を、メケゴ（ものもらいもメケゴという）といいます。別名メケ・メーケともいいます。メーケは目が粗く編んであり、手頃な大きさで使いやすく、農家の人にとって便利なものといわれています。

子どものころ、友だちと頭にメーケをかぶって上機嫌に遊び回っていたら、父に見つかり、そんなことをしたら罰があたるからやめろ、と怒られました。

「メーケをかぶるとなあ、メケゴができるンだぞ。まぶたの縁が赤くはれて痛くなり、カエク（かゆく）なるかンな。これからメーケはぜったいにかぶンなよ」

ものもらい（麦粒腫）が、メカイゴ（メケゴ）といわれるようになったのは、目籠をかぶると、目の縁が痒く引っ掻くようになるから、というお年寄りの話。つまり、メカイゴの成り立ちは、〝目〟が〝掻イ〟くなる〝籠〟という語の組み合わせだということです。

（市民記者　森下喜一）